

2012年サバ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数										量				消費支出 生(万円)
	漁獲	産地	輸入	輸出		東 京				在庫	加工品				
				生冷	缶	生	冷	塩干	塩蔵		缶	干	蔵	節	
23	392.5	330.0	60.0	97.9	1.6	9.9	3.2	2.8	0.5	64.4	28.1	18.5	50.6	15.2	1,166
24	440.2	384.6	52.6	106.6	4.0	11.8	3.2	2.3	0.4	67.8		18.1	52.5	12.4	1,250
%	112	117	88	109	252	118	100	82	91	105	0	98	104	81	107

年	価 格								消費支出 生(円)
	産地	輸入	輸 出		東 京				
			生冷	缶	生	冷	塩干	塩蔵	
23	89	245	90	349	383	492	458	480	1,038
24	82	213	86	426	331	482	525	469	1,075
%	92	87	96	122	86	98	115	98	104

漁獲と資源

24年のサバ類（マサバとゴマサバ）の漁獲量は、44万トンで前年（38.6万トン）を上回ったものの、近年の平均（50万トン）には達しなかった。

マサバ太平洋系群の資源量は、1990年代はじめまで増加し、高位水準になったが、1996年の16万トンを頂点として減少した。その後2000年と2001年は増加したものの、2004年以降は再び減少傾向となり、2011年は5.5万トンと推定されている。親魚量は1984年以降増加し、1992年に最高の6.4万トンとなった後5万トン前後で推移したが、2001年以降は連続して減少し、2011年は2.1万トンと推定されている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1970・80年代は比較的高い水準で安定していた。1987～1990年に減少した後、増加傾向を示し、1993～1996年は高い水準に達した。1997年以降、資源量は急減し、2000～2007年は低い水準で推移したが、2008年に急増した。その後は横ばい傾向を示し、2011年は65万トンであった。加入量は近年では2004年にやや高い値、2008年にかなり高い値を示した。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少したが、2009年に急増し、2011年は近年では高い値を示した。再生産成功率は1991年以降、比較的高い値を示している、1995、2004、2008年にかなり高い値を示している。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は、1995～2003年は比較的安定した加入量の継続と1996年の高い加入量によって30万トン前後の高い水準で推移し、2004年に高い加入量によって60万トンを超えてさらに高い水準となり、2011年は71.0万トンであった。2012年の資源量は、直近の調査船調査から推定される加入量等により72.6万トンである。親魚量はBlimitを大きく上回って推移しており、2011年は28.3万トンとされている。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量は1992～2011年に比較的安定して同程度の水準で推移している。近年では、資源量は2005年に18.7万トンと高い値を示したが、その後は減少傾向を示し、2008年は9.9万トンであった。2009年以降はやや増加し、2011年の資源量は15.5万トンであった。加入量は近年では2004年にやや高い値となったが、2005～2008年は減少傾向を示した。その後は増減を繰り返している。2004年の高い加入量のため、親魚量は2005年に増加した。その後は再び減少傾向を示していたが、2010年以降は増加傾向を示している。

再生産成功率は、1993、2004年に高い値を示した他は、比較的安定している、といわれている。

産地水揚量と価格（継続漁港）

24年の産地水揚量は、38.5万トンで震災等による北部太平洋海域、特に常磐犬吠埼海域と東シナ海での漁の回復等を反映し、前年（33万トン）を上回った。

価格は、生産の増加を反映し82円で前年（89円）を下回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量は、太平洋側の三陸・常磐が震災の影響からやや回復し好調、山陰、薩南が低調であったが、山陰が前年並み、東シナ海も若干回復傾向を示しやや好調であった。道東海域では、巻き網による漁獲がみられ、釧路に水揚げされたが、処理能力の問題もあって、八戸港へも水揚げされた。

海域別漁獲量

海 域	23年	24年	対比(%)
道 東	0.0	2.4	18,546
三 陸	56.6	56.3	99
常 磐	53.1	106.5	201
東 海	63.8	66.4	104
薩 南	26.7	16.9	63
東シナ海	86.7	97.1	112
山 陰	28.7	28.5	99
その他	13.7	10.4	76
合 計	329.4	384.6	117

三陸（単位：1000トン）

月	23年	24年
1	1.2	0.1
2	0.4	0.0
3	0.2	0.0
4	0.0	0.0
5	0.0	0.0
6	0.0	0.3
7	4.9	1.9
8	6.5	14.2
9	12.7	21.9
10	10.8	6.4
11	15.8	8.4
12	4.1	3.1
計	56.6	56.3

MAX：H53 69万トン

常磐（単位：1000トン）

月	23年	24年
1	12.9	11.9
2	2.6	13.1
3	1.2	5.0
4	0.4	14.8
5	0.0	4.0
6	2.9	8.0
7	0.6	0.0
8	0.0	0.2
9	1.5	0.1
10	7.1	12.6
11	12.4	25.8
12	11.4	11.1
計	53.1	106.5

MAX：H6 14.1万トン

東シナ海（単位：1000トン）		
月	23年	24年
1	12.6	15.6
2	10.7	12.2
3	4.4	7.3
4	2.2	4.9
5	3.0	8.8
6	3.0	2.7
7	2.0	3.4
8	4.2	2.1
9	6.5	3.1
10	8.5	5.9
11	10.0	8.2
12	19.6	22.9
計	86.7	97.1

MAX：H 8 22.2万トン

山陰（単位：1000トン）		
月	23年	24年
1	5.0	9.4
2	2.3	2.9
3	2.7	1.0
4	1.3	0.4
5	0.4	0.4
6	0.1	0.3
7	0.5	1.7
8	0.5	0.4
9	1.3	1.6
10	2.3	0.8
11	4.7	2.6
12	7.6	6.9
計	28.7	28.5

MAX：H 6 14.1万トン

三 陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年同様低調で、南下期は、9月にまとまった他は終漁も早く昨年をやや下回る漁獲にとどまった。

本年も福島沖合の操業を自粛により震災前とは違った操業となったが、7月下旬に八戸近海でスルメイカとの混獲によるサバの初漁があり、昨年同様12月まで漁獲がみられた。本年も8月中はゴマサバの混じりがかなり多かった。

また本年も7月下旬にまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、8月一杯操業したが、漁獲量は昨年の約9,200トンを下廻る約5,300トンであった。

魚体は、3歳魚（2009年級群）、2歳魚（2010年級群）主体に、1歳魚、4歳魚と幅広い組成であった。

また、本年のブリ（イナダ、ワカシ）の漁獲は、11月にピークがみられたが、12月まで漁期が続き長かった。したがって水揚量は、近年では最高の水準であった。

常 磐

この海域は、放射能漏れの影響で操業を回避した海域が含まれており、本年も操業がかなり制約された。本年の越冬サバ漁はやや好調に推移し、44.8千トンの漁獲で前年（17.1千トン）を大幅に上回り、震災前の水準にも上回った。

また、春（5～7月期）の北上期の漁獲はで12千トンと前年（3.5千トン）を大きく上回った、南下群の漁獲は49.5千トンで前年（30.9千トン）をかなり上回った。

なお本年も北部太平洋海域では資源回復計画に基づく休漁も多かったが、前シーズンを通して漁獲は伸び、震災前の水準に戻した。

なお、本年のブリ類（イナダ、ワカシ）の漁獲は、年末12月に集中してみられたが、近年では最も多い水揚げであった前年に比べると2008、2010年並みの水準であった。

魚体は、越冬群はほぼ2歳魚（2010年級群）主体であったが、北上期には2歳魚（2010年級群）、3歳魚（2009年級群）主体、南下期は、当初の2歳魚（2009年級群）主体に3歳魚、1歳魚も混じって漁獲された。本年は越冬期、南下期にゴマサバの混獲が目立って多かった。

東 海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、昭和54（1979）年の17.7万トン进行ピークに減少しており、近年においても概ね1万トン以下の低調な漁獲が続いている。また操業隻数も往時に比べ大幅に減少しており、本年は遂に200隻を割っている。なお隻数の減少もあってか、1隻当たりの水揚げは往時に近付いてきている。なお本年の漁獲は2,615トン（前年：3,628トン）で前年を下回り、近年でも低調な部類に入っている。

24年の漁獲量は、マサバが2,145トンで前年（2,158トン）並み、ゴマサバも471トン（前年：1,471トン）でゴマサバの減少が目立った。

東 シ ナ 海

24年前半の年明け後の冬漁は好調で昨年を上回る水揚げで、夏場の閑漁期の漁も前年並みであった。9月以降本番に当たる冬の盛漁期には前年同様12月に盛り上がった程度で、前年をやや下回る水揚げに終わった。したがって結果的には年初の好漁を反映し昨年をやや上回る水揚げになった。

山 陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が前年をやや上回ったものの、閑漁期の夏場の漁は前年同様平凡な漁、しかも秋漁以降も前年を下回る漁に終わったことで、その結果水揚げは前年並みに終わった。

魚体は、2011年級群が主体であった。

輸 入

本年の輸入量は、5.3万トンで、前年（6万トン）を引き続き下回った。本年のノルウェーからの搬入は、国内生産、特に北部太平洋海域での漁が順調に推移したことやサイズも良かったことで、買い付けの遅れもあって、本年の搬入ピークは12月に集中した。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーのシェアが87%と高かったが、90%を割ったのが目立った。また、それ以外の国では中国が2,614トン（前年：1,132トン）と倍増し、アイルランド、カナダ、がそれぞれ1,363トン（前年：935トン）、241トン（前年：671トン）で、アイスランド932トンと伸びが目立った。

本年のノルウェーからの輸入原料は600サイズ以下が95%（前年：94%）主体に600gUPが5%（前年：6%）で、シェアでは600gUPが本年も更に減少し、本年も600g以下が更に増加している。また600gUPを始め日本とロシア、中国等諸外国との競合関係が顕著になっているが、本年は、ノルウェーサバを巡っては600gUPサイズでは、買付価格の日本側の優位（2-10クロネ他国より高く買っている）が目立ちシェアも依然半分を占め多い。

価格は、213円で前年（245円）を上回ったが、600アップは前年より買い付け価格が上昇し、逆に600アンダーは4クロネほど昨年を下回った。

また、中国（約7割）、タイ（約3割）等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年も11,778トンで前年（11,060トン）を引続き伸びている。

輸 出

本年の輸出量は、国内生産の増加もあって、再度10.7万トンで前年（9.8万トン）を上回った。がまだ震災前の水準には達しなかった。

この結果、本年もエジプトへの輸出がまだ回復しておらず少なく、本年もタイ、ベトナム、ガーナ、フィリピン、台湾、中国、エジプト、マレーシア、韓国の順に変わったが、依然東南アジア諸国の伸びが大きいのと、アフリカへも伸びている。また、缶詰輸出は4千トンと久しぶりに前年（1.6千トン）を上回った。

在 庫 量

在庫量は、6.8万トンと前年（6.4万トン）を若干下回った。

これは、国内生産・輸入量の減少と輸出量の増加があったものの、国内生産量の増加がより大きく反映された結果である。

消費地入荷量と価格

24年の東京消費地入荷量は、生鮮が1.2万トンと前年（1万トン）を上回った。

また、冷凍は3.2千トン（前年：3.2千トン）、塩干2.3千トン（前年：2.8千トン）、塩蔵0.4千トン（前年：0.5千トン）であったが、本年は国内生産が増加したことで、鮮魚での消化が目立ち、前年震災の影響で日持ちのする製品の需要が出た塩蔵、塩干品は通常のベースに戻り扱いは前年を下回った。生鮮、冷凍はほぼ本年も変化なく前年並みであった。

価格は、生鮮331円（前年：383円）、冷凍482円（前年：492円）、塩干525円（前年：458円）、塩蔵469円（前年：480円）で、冷凍原料がノルウェー物の高騰で国産物の扱いが多くなり若干下げた。その他生鮮、塩干は入荷の増減に左右された結果が出ている。

また、本年も消費地市場、末端のスーパー・量販店では、時期によってはゴマサバが恒常的に販売されるようになり、鮮魚販売や、缶詰を含む加工品にもかなり利用・定着している。なお消費支出をみると数量、金額とも増加した。